

【解説】

第 1 問 世界史上の歴史的建造物や遺跡

A

問 1 正解③ (歴史的建造物) 1

- ①ヴェルサイユ宮殿はフランス絶対王政のシンボルであり、ルイ 14 世時代に建造が始まった。P. 201 と P. 208 で確認できる。オーストリアのシェーンブルン宮殿、プロイセンのサンサーシ宮殿と並び称される有名建築であり、様式の違いも確認しておきたい。P. 208 には各宮殿内部の写真もある。
- ②スレイマン=モスクはイスタンブールの大モスク群の中のひとつで、折り重なるドームとミナレットの調和が見事 (P. 177)。その名の通り、オスマン帝国最盛期のスレイマン 1 世時代のもの。
- ③アンコール=ワットはヒンドゥー教寺院から仏教寺院に転じた東南アジアを代表する大建造物で (P. 101)、ボロブドゥールと双璧をなす。東南アジア史については、民族・宗教の混交と多様性がポイントとなるので、P. 102 などを利用して整理したい。
- ④アルハンブラ宮殿は現スペインにあるナスル朝時代のイスラーム建築で、繊細なアラベスク模様が見る者を魅了する (P. 129)。ナスル朝はレコンキスタの最終局面でキリスト教勢力に対峙したイベリア最後のイスラーム国家である。レコンキスタの過程も P. 143 で確認しておこう。

問 2 正解④ (反乱や独立運動, 戦争) 2

- ①P. 224 を参照して、ラテンアメリカ独立の経過や指導者を整理したい。メキシコの独立はイダルゴが、ハイチの独立運動はトゥサン=ルヴェルチュールが指導した。
- ②農奴制の明確な帝政ロシアでは、コサックと呼ばれる逃亡農民による戦士団が形成された (P. 204)。ステンカ=ラージンやプガチョフの反乱はコサックが中心となっている。ポーランドの苦難の歴史については P. 203 参照。周辺の大国による「ポーランド分割」で祖国が消え、コシューシコなどの反乱を生じさせた。独立回復は第一次世界大戦後である。

- ③P. 261 参照。第一次世界大戦初期のドイツはフランスとの短期決戦を狙っていたが、マルヌの戦い以降、塹壕戦が泥沼化した。戦争が長引く中、ドイツの無制限潜水艦作戦の宣言がアメリカの参戦を招いた。マルヌの戦いそのものよりも、第一次世界大戦の流れを理解しておきたい。
- ④黄巾の乱については P. 113 参照。黄巾の乱は太平道・五斗米道などの宗教結社の発展と並行する民衆反乱である。中国歴代王朝の民衆反乱には、白蓮教と結び付いた紅巾の乱のように、宗教と関係したものが多い。

問 3 正解② (17 世紀にイギリスで起こった出来事) 3

- ①イングランド議会の発展については P. 148 の 2 で整理したい。騎士・都市を代表する市民・下級聖職者を含む模範議會をエドワード 1 世が招集したのは 13 世紀末。マグナ=カルタ以降の議会制度の発展はいずれも、国王の恣意的な課税や専制を抑制する働きを有していた。
- ②ピューリタン革命・名誉革命については P. 205 で整理し、チャールズ 1 世→クロムウェル時代→チャールズ 2 世→ジェームズ 2 世のそれぞれの治世の特徴を確認しよう。
- ③産業革命における技術発展については P. 213 参照。機械と発明者をやみくもに覚えるのではなく、織布の発展(飛び杼)→紡績機の発展(ジェニー紡績機, ミュール紡績機)→再び織布の発展(力織機)のような流れを理解したい。
- ④保守的なウィーン体制下のヨーロッパで、早くから自由主義的傾向の強かったイギリスの内政・外交を P. 226 で確認しよう。労働組合法は 2 回の選挙法改正の後、自由党グラッドストン内閣で成立した。

B

問 4 正解① (朝鮮半島の歴史) 4

朝鮮半島の歴史については、P. 174 のテーマページに整理されている。近年、世界史の中の日本史がクローズアップされつつあるので、中国・日本との関わりを含めた学習が求められる。

①年表にある通り正文(地図[C])。このうち、新羅が唐朝の支配に対抗しつつ、半島中南部を統一していく(地図[D])。

②新羅に次いで半島を支配した高麗は、王建が建国した。大祚榮は新羅よりも北方を支配した渤海の建国者(地図[D])。

③P. 252 参照。半島は、近代化していく日本と朝鮮を朝貢国とする清朝の間で覇権争いの場となった。同ページ[3]にもある通り、大院君は攘夷派であり、閔氏側と対立していた。

④P. 296 参照。日韓基本条約は朴正熙政権期の出来事。同大統領の暗殺以降、しばらく韓国は軍事政権の時代に入る。

問 5 正解⑥ (冷戦期の出来事) 5

P. 286～P. 293 で戦後史を時代ごとに区分して整理しているので、順に確認してみよう。

冷戦が雪どけ・デタントと緊張を繰り返しながら続く中、米ソ両国が核戦争直前に至った瞬間がキューバ危機であった(P. 288)。この背景には、親米政権打倒をめざしたカストロらの革命があるので、P. 307 も合わせて参照したい。ただし、キューバ危機は米ソ首脳対話を生み、後のデタントの契機ともなった。

その後、ベトナム戦争の泥沼から抜け出したいアメリカは、ニクソン大統領の訪中を実現させる。その余波と言えるのが、日中国交正常化と日中平和友好条約である(P. 290[2])。

チェルノブイリの事故(P. 310 写真⑩)はソ連のハイテク化の遅れを象徴する事件であると同時に、ゴルバチョフによるペレストロイカ・グラスノスチを進展させる一因となった。

問 6 正解③ (遺跡や遺物の発見) 6

a ラスコーについては P. 67 参照。南仏のラスコー・ショーヴェ、スペインのアル

タミラ等では旧石器時代の遺跡が多く発見されている。

- b 兵馬俑については P. 109 のコラム参照。始皇帝陵を守るように、膨大な数の兵士と馬が隊列をなしている。

C

問7 正解④ (ポーランドの歴史) 7

- ①コペルニクスとガリレイの地動説は、ルネサンス期の科学を代表するとともに、当時のカトリック教会のあり方を知るポイントでもある。P. 193 の3参照。
- ②P. 203 の3参照。コシューシコはアメリカ独立戦争に参加した後、ポーランド分割に抵抗したナショナリスト。パリ=コミューンは、プロイセンとの戦争でフランス第二帝政が崩壊した後、パリ民衆が短期間樹立した「市民政府」(P. 227 の7)。
- ③ピウスツキは、帝政ロシアの崩壊を背景にポーランド独立を勝ち取った建国の父であり、かつ独裁者でもあった。P. 268 の2に掲載されている。
- ④冷戦期のポーランドは社会主義体制をとるものの、ソ連とは一線を画す意識も持っていた。スターリン批判の後のポズナニ暴動(反ソ暴動)や、民主化をめざすワレサの「連帯」などに、その意識が見える。冷戦期の東欧については、P. 311 で整理できる。

問8 正解② (第二次世界大戦に関わる歴史的建造物) 8

ユダヤ人に対する迫害はナチスに始まったことではない。P. 277 を見ると、様々な理由、様々な形の迫害が行われたことがわかる。迫害を避けつつ離散したユダヤ人はポーランドやロシアに比較的多く(地図A)、ポーランドに位置するアウシュヴィッツがホロコーストの舞台となった。

レジスタンスは、ドイツに支配されたフランスやユーゴスラヴィアなどの反ファシズム運動であり、P. 280 に掲載されている。ここから、ド=ゴールらの「英雄」も生まれた。

戦後処理については P. 283 の3を参照。ナチス=ドイツの戦争犯罪はニュルンベルクで裁かれた。

問9 正解② (ロシアやソ連の君主・指導者) 9

- ①P. 141 の5参照。ロシアとギリシア正教の関わりは、キエフ公国ウラディミル1世の改宗で深まる。正教の「本山」であるビザンツ帝国滅亡後、モスクワ大公国は正教世界の盟主の継承を自認し、ツァーリの称号も受け継いでいった。
- ②P. 265 参照。レーニンの指導したロシア革命後のロシア・ソ連は、コミンテルンの存在に象徴されるように社会主義革命の波及を意識し、資本主義世界と対立し

た。しかし、レーニン没後の権力闘争の中で、トロツキーの世界革命論とスターリンの一国社会主義論の内部対立が起こり、後者が勝利をおさめる。

③P. 291 および解答番号

5

 の解説を参照。

④ロシア革命そのものの進展については、P. 264 で確認したい。二月革命で成立した臨時政府の妥協的性格や戦争継続方針に反発したボリシェヴィキが、十月革命で政権を握っていく流れである。臨時政府の首相となったのは社会革命党のケレンスキーで、臨時政府とボリシェヴィキのパイプ役を期待された。

第2問 世界史上の記録や文字

A

問1 正解② (北海・バルト海周辺の歴史) 10

- ①ノルマン人はゲルマン人と同様、全ヨーロッパに浸透して大きな影響を与えた。
まずはP.136の①で移動・建国の様子を整理したい。そのうえで、イングランド史への影響として、デンマーク王子クヌートによる征服、ノルマンディー公による征服を確認しよう(同ページの②)。
- ②中世ヨーロッパの北海・バルト海商業圏についてはP.144に詳しい。同商業圏を結びつけるハンザ同盟都市に毛織物を供給していたのがフランドル地方だから、原料の羊毛は(ハンザ同盟都市を経由しつつ)近場のイングランドから得ていた。
- ③P.200参照。グスタフ＝アドルフが参戦した三十年戦争は、近世ヨーロッパ史の重要ポイントの1つで、カトリックとプロテスタントの宗教戦争であると同時に、フランス王家とハプスブルク家の長年にわたる対立の一局面とも言える。結果としてのウェストファリア条約の内容も含めて、きっちり理解したい。
- ④P.205にあるように、航海法が制定されたのはピューリタン革命後の共和政時代。17世紀はイギリスの重商主義の発展期でもあり、オランダやフランスと覇権を争いながら、北米・インドに勢力圏を広げていった。その過程はP.210・P.211を参照し、特に地図も活用しながら確認しておこう。

問2 正解② (支配に関わる歴史) 11

- ①フォークランド戦争についてはP.307でわかるように、イギリスとアルゼンチンの紛争。
- ②アフリカ植民地化についてはP.257で整理。英仏に比べてドイツ領はカメルーンなどに限定されている。これに劣勢を感じたヴィルヘルム2世が、モロッコ事件を起こすこととなる。
- ③大航海時代以降のポルトガルの拠点としては、ゴアやマラッカ、マカオなどに注目が集まりがちだが、中東のマスカットやホルムズにも支配地を確保していた。P.45で確認しよう。ホルムズからポルトガル人を追放したのはサファヴィー朝時代で、P.176に掲載されている。
- ④ニューファンドランドは現カナダの東端で、ユトレヒト条約を経てフランス領か

らイギリス領になった(P. 211)。同条約と 1763 年パリ条約による領土変更は、英仏の海外進出史では大きなポイントである。

問 3 正解③ (事績や戦争の記録) 12

- ①ヒンドゥー国家になる前のインドで、仏教とダルマに基づいた統治をめざしたのがアショーカ王。P. 98 の地図Aに、石柱碑の分布が示されている。
- ②P. 89 参照。カエサルは共和政ローマの将軍でガリア遠征を行い、後に独裁化して暗殺された。歴史的逸話の豊富な人物だが、『ガリア戦記』(P. 92)は見事なラテン語で記され、歴史史料としても価値が高い。
- ③P. 136 参照。タペストリ(タピスリー)には歴史的な場面が描かれているが、イングランドを征服したのはデーン人やノルマン人である。マジャール人は P. 136 の地図Aにある通り、東方から移動して神聖ローマ帝国と戦った後(P. 135 の年表も参照)、現ハンガリーの基礎を築いた。
- ④同絵画は P. 221 に掲載されている。ダヴィドはフランス革命を描いた画家というイメージが強く、「球戯場の誓い」「マラーの死」「サン=ベルナール峠を越えるボナパルト」も図表に掲載されている。ウィーン体制下のロマン派画家であるドラクロワと対比されることも多い。

B

問 4 正解③ (国家の建設と文字の制作) 13

宋代中国と関わった契丹・西夏・金については、P. 153 で統治体制などの基本事項を整理したい。それぞれが独自の文字を使用したことも特徴的で、P. 157 の 5 に例示されている。また、P. 152 にあるように、完顔阿骨打の建国した金に滅ぼされた契丹の耶律大石が、内陸アジアで西遼を建国する。

問 5 正解① (チンギス=ハンの事績) 14

モンゴル帝国は 13 世紀中に P. 39 のような大帝国となるが、P. 162 の年表や地図 A を利用して、拡大の経過を整理することは必要だろう。①はチンギス=ハン、②はオゴタイ、③はフビライの時代の事象である。④のチャハル部は明清代まで残存したモンゴル系部族の居住地で、清朝の藩部として統治された (P. 171 の 3)。現代の内モンゴルに相当する。

問 6 正解③ (アンカラの戦い) 15

該当するのはアンカラの戦い(1402 年)であり、P. 178 で確認できる。15 世紀がティムール帝国の台頭期であることは P. 43 で見ておきたい。一方、アンカラの戦いで一時中断したオスマン帝国もやがて復活し、15 世紀半ばにはコンスタンティノープルを陥落させ、16 世紀前半にはプレヴェザの海戦でキリスト教勢力を破ることとなる。同海戦の場所は P. 179 の地図 B にある。

C

問7 正解③ (インドの王朝や政治勢力) 16

- ①ムガル帝国の端緒はバーブルの侵入にあり、P. 180 の地図[C]で確認できる。重要なアクバルとアウラングゼーブの治世について年表等で整理するとともに、最大領域を地図[D]で見ておこう。アウラングゼーブ時代に領土は最大となるが、ヒンドゥー教徒に対する抑圧政策から反乱を招くこととなる。
- ②南インドの古代王朝としては、東西交渉の要衝となったサータヴァーハナ朝(P. 12～P. 17)、シュリーヴィジャヤに遠征してインド洋海域支配を制覇したチョーラ朝(P. 35)などを忘れてはならない。
- ③インドの植民地化を争った英仏の拠点については、P. 211 や P. 244 の地図を用いて確認することが必要。
- ④ヴィジャヤナガル王国はアクバル時代のムガル帝国と対峙した(P. 180 の地図[C])。しかし、「大量の馬」はおかしい。優れた馬は内陸アジアに多い。

問8 正解① (歴史書や歴史学) 17

- ①P. 84 で確認。アケメネス朝との戦争を描いたヘロドトスと、ペロポネソス戦争を綴ったトゥキディデスは、歴史叙述の方法も異なるため、よく対比される。
- ②司馬遷について、P. 112 のコラムを見て欲しい。中国歴代王朝の正史編纂に影響を与えただけでなく、人間像を生々しく伝えることで歴史の本質を掘り下げた。ヘロドトスと並び称される「歴史の父」である。
- ③P. 128 参照。イスラーム世界の史学では、ラシード=アッディーンとともによく登場する。イブン=バットゥータと混同しないように。
- ④ナショナリズムの台頭の中でドイツが国民国家を形成するのに並行して、史料批判に基づいた近代歴史学が確立した(P. 240)。その代表格がランケである。

問9 正解① (貴族の歴史) 18

- ①プロイセンなどの東欧世界は、マニュファクチュア等が芽生え始めた西欧世界に対する穀物輸出地域となり、グーツヘルシャフトが拡大した。このことから必然的に、政治・軍事を握るユンカーが台頭したのである。P. 202 を参照。ビスマルクの強権もユンカーとしての地位に依存した。P. 229 も合わせて確認したい。
- ②P. 88 の下部参照。古代ギリシアと異なり、共和政ローマにおける平民への参政権

拡大は完全なものではなかった。平民(プレブス)の一部が政權支配に参画したに過ぎない。旧来の貴族をパトリキ，平民の一部を吸収した新貴族層をノビレスと呼ぶ。

③唐末は中国史の轉換期で，門閥的貴族の没落と新興地主(形勢戸)の台頭が，宋代にかけて進展した。P. 120 の¹で流れを確認しよう。形勢戸は同時に知識人として文化(朱子学等の儒学も含む)の担い手となり(P. 155)，しばしば科挙に合格して官戸と呼ばれる有力者集団と化していった(P. 153 の²)。

④P. 218 の²参照。貴族は聖職者とともに特権を持つが，カトリック国家であるフランスでは，第一身分が聖職者になっていた。

第3問 世界史上の国際関係

A

問1 正解③ (アメリカ合衆国の経済) 19

- ①歴史の流れをつかむうえで、極めて重要な事項。P. 255 の2でわかるように、19世紀末、既にアメリカは世界最大の工業国だったが、その発展の裏で債務を抱えていた。イギリスよりも「後発」だったから、当然である。しかし、第一次世界大戦に参戦し勝敗を決したアメリカは、これを機に債権国に転じ、世界経済を牛耳っていく(P. 270)。
- ②P. 254 に見られるように、アメリカでは企業合同など独占資本化が進んだ。ただし、同ページの風刺画の通り、独占に対する社会からの批判は強く、反トラスト法の制定などが相次いだ(P. 256)。
- ③TVAを含むニューディールは、資本主義の矛盾を緩和する財政政策の基本理念になっていく。P. 276 の2で整理したい。
- ④重化学工業を含む本格的産業革命は南北戦争後であるが(P. 236 の1)、イギリス経済からの自立の芽生えは米英戦争と言って良い。P. 234 の写真①解説を参照。

問2 正解③ (独立の歴史) 20

- ①P. 257 参照。モザンビークはポルトガル領。
- ②ギリシアはオスマン帝国からの独立である。P. 232 の地図A参照。ギリシア独立はウィーン体制を揺るがす事件の1つであり(P. 223 の年表参照)、バルカン半島のナショナリズムに列強の利害が絡む東方問題の端緒ともなった(P. 232 の1)。
- ③P. 102 参照。ベトナム南部は港市国家として発展する一方、北部は李朝として中国から独立した後も、一時、明朝に服属した。南北が「統一」されるのは18世紀末以降である。
- ④明らかな誤文。インドネシアはオランダ領、マレーシアとシンガポールはイギリス領である(P. 246 地図B)。ただし、マレーシアとシンガポールは華僑・華人の比率が異なる(地図C)。これも背景となって、シンガポールは「マレーシアから分離独立」することになる。P. 298 の1に掲載されている。

問3 正解① (20世紀前半のイギリスの経済政策) 21

世界恐慌下の主要国の動向については、P. 276 の³を参照。地図ではカナダがドル地域になっているが、一方でイギリス連邦の存在、カナダが連邦内の自治領であることを踏まえれば、ドイツよりもカナダとの貿易が増えることは容易に想起できる。ダンバートン=オークス会議は P. 283 に掲載。国連設立への布石となる重要な会議である。

B

問 4 正解② (国際関係の歴史) 22

- ① P. 198 の 2 参照。16 世紀のイギリスをとらえるポイントの 1 つは、国教会とカトリックの間の「揺らぎ」である。その意味で、メアリ 1 世は重要。大ブリテン王国の成立はアン女王の治世であり、P. 205 の年表末尾で確認できる。アイルランドの合同はさらに遅いので注意。
- ② アメリカの領土拡大過程は P. 234 で整理しよう。テキサス併合を契機とするメキシコとの戦争の結果、アメリカに割譲された領土の中にカリフォルニアが含まれていた。
- ③ いわゆる「未回収のイタリア」のことだが、回収すべき相手はオーストリア。イタリア統一が一段落する 1871 年で「未回収」だった領域の場所を、P. 228 の地図 B で見ておきたい。これらが「ほぼ」イタリア領になるのは第一次世界大戦後のサン＝ジェルマン条約の時である (P. 267)。
- ④ P. 309 参照。E C S C など 3 組織から E C が結成される。E C の原加盟国でないイギリスは当初 E F T A に属していたが、やがて E C に鞍替えする。イギリスが現在 E U からの離脱を表明していることをふまえると、このような出題は時事問題とも言えるだろう。

問 5 正解① (ハプスブルク家の支配領域) 23

14～15 世紀のハプスブルク家の領土はまだ小さい (P. 149 地図 B) もの、神聖ローマ皇帝位を事実上世襲するようになる (P. 148 年表)。次に P. 345 を見て欲しい。スペイン王だった同家のカルロス 1 世が神聖ローマ皇帝を兼ねてカール 5 世を名乗る。彼はオーストリアとスペイン、さらにその植民地をすべて領有する大帝国の主となった (P. 198)。この時の状態が、問題の地図 a である。しかし、カール 5 世は退位に際して、領土を弟と息子に分割相続し、大帝国はスペイン系とオーストリア系に分かれていく。17 世紀半ばでもその状態は続いているのが、P. 200 の地図 A で分かる。しかし、ハプスブルク家はフランス-ブルボン家との対立が激しくなり、18 世紀に入るとスペインはブルボン家のものとなる。この状態が P. 203 の地図 C、すなわち問題の地図 b である。

問 6 正解④ (オスマン帝国の歴史) 24

- ①P. 178 年表と P. 179 地図[B]参照。レパントの海戦での敗北後も全盛を維持したオスマン帝国は、第2次ウィーン包囲失敗から領土の縮小傾向が顕著となる。カルロヴィッツ条約によるハンガリー喪失は、その初期の事例と言える。
- ②オスマン帝国の独特の統治体制は P. 179 の図を見て、しっかり理解しておこう。元キリスト教徒を徴用するイエリチェリ軍団、間接統治と直接統治の使い分け、異教徒に認められた自治システムのほか、帝国内の「非」ムスリムに認められた通商権(カピチュレーション)も重要である。特に、カピチュレーションは、全盛期のオスマン帝国経済を支えたが、衰退期に入ると、治外法権を含む不平等条約に近似する機能を発揮した。
- ③テマ制はビザンツ帝国のシステムで、P. 139 の表で確認できる。同帝国で後に採用されるプロノイア制とともに理解しておこう。
- ④P. 260 の[2]参照。1878 年のベルリン会議以降、バルカンの領土喪失が急速に進んだオスマン帝国は、イタリアにリビアを奪われ、ロシアの支援するバルカン同盟にも敗北して、イスタンブルを除くバルカン半島の領土をほとんど失った。このような流れの中、第一次世界大戦でオスマン帝国はドイツ・オーストリアの同盟国側で戦い(P. 261)、敗北して、トルコ革命を迎える。

C

問7 正解② (巡礼の歴史) 25

- ①P. 142 に詳細な記載のある聖地イエルサレムへの十字軍には、騎士(軍人)だけでなく、多くの巡礼者も含まれていた。中世ヨーロッパの巡礼先はイエルサレムに留まらず、ローマやサンティアゴ(サンチアゴ)をめざす人も多かった(P. 143 コラム)。
- ②ムハンマドの出身部族からもわかるように、イスラーム教徒は商業活動に秀でた集団でもあり、アジア人やヨーロッパ人の商人と結びついて巨大なネットワーク(P. 161 の地図[D])をつくりあげた。その隅々まで旅行し、『三大陸周遊記』をのこしたのがイブン=バットゥータである。付属する年表の中に「巡礼」「ジハード」という言葉が見られる通り、彼の旅は単なる余暇や娯楽ではない。イスラーム=ネットワークの時代、海の道・シルクロード・草原の道を結合するもう1つの原動力となったのが、モンゴル帝国の成立である。P. 165 地図[C]も合わせて見ておきたい。
- ③後のアメリカ合衆国となる13植民地の本格的端緒と言えるのが、ピルグリム=ファーザーズの入植である。P. 216 の年表やコラムを参照したい。彼らはカトリックではなく、信仰の自由を求めてイギリスから逃れたピューリタンである。
- ④P. 130 の[3]とP. 131 の[5]参照。西アフリカのイスラーム国家としては、イベリア半島にまたがるムラービト朝・ムワッヒド朝に加え、ニジェール川方面で岩塩・金の交易で栄えたガーナ・マリ・ソンガイ王国も重要である。マリ王国のマンサ=ムーサについては、コラムもあるので読んでほしい。

問8 正解① (マムルーク朝の対外関係) 26

P. 126 の4つの地図とその解説を見て、イスラーム史の流れを理解しよう。マムルーク朝はキリスト教徒による聖地十字軍の最後の拠点を陥落させ、モンゴル勢力の侵入を撃退したうえ、メッカ・メディナを支配して、アッバース朝に代わるイスラーム世界の盟主的存在となっていく。カイロにおける商業・学問の発展もマムルーク朝時代が目立つ。

- ①これが正文。地図[D]参照。
- ②誤文。イエルサレム奪回はアイユーブ朝のサラディン(地図[C])。
- ③誤文。北インドに侵入するのはガズナ朝やゴール朝(地図[B]・[C])。

④誤文。アナトリアに進出したのはセルジューク朝(地図[B])。

問9 正解④ (政治的・宗教的な権威や権力) 27

- ①ピラミッドそのものについてはP.72に詳しい。ファラオの権力が背景にあって、はじめて建造できる規模と言える。建築と言うより大事業と言うべきだろう。建造時期は古王国時代である。P.70の年表も見ておきたい。
- ②P.95の図式を参照。ミラノ勅令により、ローマ帝国でキリスト教が公認された後、教義の確立が重要となった。アタナシウス派や三位一体説が正当化されていく過程は整理したい。ニケーア公会議はコンスタンティヌス帝が招集している(写真⑦解説)。教皇権が確立するのはグレゴリウス1世の頃とされるので(P.138年表)、ニケーア公会議で至上権の「再」確認はおかしい。至上権の再確認が必要となるのは、ルターなどによる宗教改革の結果であり、トリエント公会議を想起すべきである(P.194年表)。
- ③P.108で諸子百家を整理しておこう。法による統治は法家思想であり、商鞅・李斯のように権力者に使えた学者も多い。墨家は平等愛(兼愛)や非攻(侵略の否定)を解き、儒家に対抗し得る強力な教団となった。
- ④P.126の地図[A]またはP.32参照。10世紀は、3カリフの鼎立やシーア派の台頭など、イスラーム世界の分裂傾向が顕著で、ファーティマ朝はその象徴的存在。

第4問 世界史上の宗教と政治

A

問1 正解① (古代ギリシア) 28

- ①P. 80 年表と P. 81 の7参照。ペリクレス時代の末期、アテネとデロス同盟の覇権にスパルタ陣営が対抗して起こったのがペロポネソス戦争で、戦争初期にペリクレスを疫病で失ったアテネ側が敗北した。この戦争の後、アケメネス朝がギリシア諸ポリスの争いに介入して混乱を助長し、ポリス社会の崩壊が顕著となる。
- ②フィリッポス2世率いるマケドニア軍がギリシア軍を破ったのがカイロネイアの戦い。P. 82 参照。
- ③テミストクレスが登場するのはサラミスの海戦であり、P. 80 の年表で確認できる。この時活躍した三段櫓船の漕ぎ手が無産市民であり(P. 81 に写真あり)、アテネ民主政の完成につながった。アクティウムの海戦はローマとプトレマイオス朝エジプトの戦いであり、ギリシア系王朝が旧アレクサンドロス大王帝国領を支配したヘレニズム時代の終焉を告げる。P. 82 の年表を確認しよう。ローマはエジプトを属州とし、地中海を囲む体制を完成させた。P. 91 の地図Dも見ておきたい。
- ④前述の通り、デロス同盟はアテネ中心。

問2 正解③ (「ピピンの寄進」が行われた時期) 29

P. 135 でフランク王国とカトリック教会の結び付きを整理しよう。クローヴィスのアタナシウス派への改宗→カール=マルテルがトゥール=ポワティエ間の戦いでイスラームに勝利→ピピン3世のランゴバルド撃破と教皇への領地寄進→カール大帝時代のランゴバルド王国滅亡と「戴冠」という順に進む。

「ピピンの寄進」はランゴバルド王国の存在が前提なので、a は間違っている。カール=マルテルが勝利したのはイスラーム国家に対してであるから、トゥール=ポワティエ間の戦いは西ゴート王国(ゲルマン国家)の滅亡よりも後になる。「寄進」はこの戦いよりさらに後なので、b も不適である。d はカールの戴冠よりも後になるので不適。したがってc が正解となる。

問3 正解③ (社会や政治への風刺・批判) 30

- ①エラスムス『愚神礼讃』についてはP. 192 の2。ラブレールはモンテーニュと並ぶ

フランス＝ルネサンス文学の代表格であり， P. 188 の²に掲載。

- ②P. 216 参照。イギリス本国による重商主義的統制が強まる中，印紙法に対する反発が「代表なくして課税なし」の主張を生み出した。全権委任法はヒトラーの独裁化過程で登場する。P. 278 年表参照。
- ③P. 222 の写真②解説参照。フランス革命前の状態にヨーロッパを戻そうとするウィーン会議の議事は難航し，このように擲擧された。
- ④古代ギリシアでは P. 87 のような劇場で悲喜劇が上演され，市民の政治意識の醸成に寄与した。特に喜劇には社会を風刺する題材も多かった (P. 84)。アリストファネスが喜劇の名手であった。ヘシオドスは叙事詩で知られる。

B

問4 正解① (漢代の出来事) 31

- ① 呉楚七国の乱については P. 110 の地図 **A** 参照。背景には前漢時代の諸侯領の削減がある。
- ② 唐代の律令体制、特に三省六部の設置については P. 117 の **5** 参照。
- ③ 15 世紀の明では、北方からモンゴル勢力の侵入が相次ぎ、正統帝が捕らえられる事態も起こった。P. 166 年表や P. 167 の図「明の対外関係」で確認しよう。
- ④ 八王の乱・永嘉の乱は西晋時代の事象。P. 114 で確認。

問5 正解④ (中国の学問や文化) 32

- ① 顧炎武は P. 173 に掲載。黄宗羲とともに明末清初の考証学の学者として知られる。陽明学では明代の王守仁が有名。
- ② 四六駢儷体は、魏晋南北朝時代の南朝の門閥貴族文化の典型である。P. 115 の **2** を参照。韓愈は唐代の散文家で、四六駢儷体に反対した。(P. 118 の **1**)
- ③ P. 173 参照。清朝は反満思想の弾圧の一方で、学術は奨励し、『四庫全書』を含む編纂事業を進めた。明代永楽帝による編纂事業の『四書大全』などと混同しないようにしたい。
- ④ 儒学の古典であり、科挙の出題にも関係する四書五経については P. 112 に整理されている。P. 155 の **4** では、朱子学が四書重視したことが確認できる。

問6 正解③ (宗教や信仰) 33

- ① P. 114・P. 115 に三大石窟が整理されており、北朝における国家仏教の成立が想起できる。非漢族系王朝の北朝は儒学に代わるイデオロギーとして、仏教や道教を利用することも多かった。南朝の貴族仏教と対比される。
- ② キリスト教が拡大する前のローマ帝国では、古代ギリシアの神々に加えて、オリエント起源の宗教(ミトラ教やマニ教)も信仰された。P. 92 **1** 参照。
- ③ P. 139 参照。レオン3世の聖像禁止令は東西両教会の対立の一側面であり、同時にビザンツ皇帝が聖俗両権を握っていることの表れでもあった。
- ④ P. 127 参照。ガザン=ハンはイル=ハン国の君主で、イスラームに改宗し、イラン系官僚を登用して国家体制を固めた。

C

問 7 正解③ (太陽崇拜) 34

- a 古代インドの宗教的キーワードは輪廻転生である。太陽神ラーは古代エジプトの信仰対象であり、ナイル川の定期的氾濫や天文学の発展と結び付いていた。P. 75 2 参照。P. 72 の写真③「死者の書」などからもわかるように古代エジプトは多神教であり、その主神にラーが存在する。
- b 古代アメリカの文明でも太陽信仰は強かった。P. 185 参照。マヤ文明のピラミッドはその象徴と言える。インカ帝国では、支配者が太陽の化身とされた。

問 8 正解② (スペインのアメリカ大陸への進出) 35

- ①P. 185 参照。アステカ文明はコルテスに、インカ文明はピサロに征服された。先住民の知らない鉄砲や馬を備えた軍隊の力は、実数以上に強力だった。
- ②ラス=カサスについては P. 186 のコラム参照。いわゆる「コロンブスの交換」で、ヨーロッパ人はトウモロコシやジャガイモなど有用な作物に出会ったが、先住民側は未知の伝染病や強制労働により人口激減の憂き目に遭う。このような支配のあり方の不当性を訴えたのがラス=カサスであった。
- ③ポトシは日本の石見とともに世界最大級の銀山として発展した。メキシコ銀と日本銀が世界規模の交易を支えた 16～17 世紀の様子について、P. 187 で学習して欲しい。
- ④大航海時代で先行したスペインとポルトガルの勢力圏を分けたのがトリデシリャス条約とサラゴサ条約で、P. 183 に掲載されている。両国に続くのが、東インド会社を設立し重商主義政策を採った英仏蘭である。

問 9 正解③ (第二次世界大戦終結以前の出来事) 36

- ①サミット開催の背景は、世界経済の多極化と石油危機に伴う不況であった。P. 290 の写真④解説を参照。
- ②P. 289 と P. 304 参照。第二次世界大戦後、アフリカ諸国の独立が相次ぎ、特に 1960 年は「アフリカの年」と呼ばれるほどの独立ラッシュとなった。アフリカ諸国の連帯を掲げて設立されたのが O A U であり、後に A U に改組されて新たな段階をめざしている。この間に西サハラ以外のアフリカ大陸諸国が独立を達成している。
- ③P. 279 参照。ゲルニカ爆撃は第二次世界大戦の前哨戦と言われるスペイン内戦で

の出来事。この惨劇を描いたピカソの絵画も、芸術史上に輝く衝撃作だろう。

- ④P. 286 参照。トルーマン=ドクトリンはマーシャル=プランやN A T Oと同様、アメリカ合衆国による西側陣営(特に西欧諸国)の囲い込みを示す事象。